ライノ(亡霊)と行く提督業

三笠改二

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男は、いつの間にか古本屋に居た。

そこで見つけた１冊の手帳を開くと、真っ白な空間でサファイアブルーの髪の少女にあった。

……そして、夢は終わり目が覚めると、知らない天井を見た。

出会うのは、自分の部下を名乗る少女たち。

行うのは、覚えていない提督業。

敵は、正体不明の深海からの使者。

何も分からず、覚えていない青年は、夢でも現実でも騒がしいサファイアブルーの少女と共に、今日も何とか生きていく。

最近思ったこと……２話の関門を越えられた人マジ勇者

少し、マイルドにはなったはず……なんだがなぁ

目　次

第１話　始まり ―― 1
第２話　■■■「おはなししよーよ！」 ―― 4
第３話　誰ですか……？ ―― 7
第４話　テイトク＝サン？知らない人……って俺!? ―― 10
第５話　指揮官ライノ ―― 15
第６話　友軍救出作戦（前編） ―― 17
第７話　友軍救出作戦（中編） ―― 21
第８話　友軍救出作戦（後編） ―― 25
第９話　〈港無き艦隊〉 ―― 29
第１０話　記憶の断片～その１～ ―― 32

第1話　始まり

「なんだこれ？本じゃないよな」
少し田舎に行けば必ず一件はあるひっそりと佇む古本屋。
そんな古本屋を漁ｒ…掘り出し物を探すのが趣味である俺は、本棚に収まった古い手帳を見つけた。
その手帳はかなり年季が入っていた。
表面の革はかなり傷んでおり、火に炙られたのか少し煤けていた。
珍しいことにペンホルダーが付いており、中には傷だらけの万年筆がホールドされている。
「誰かの忘れ物かな……少し中身を確認してみるか、誰が持ってたか分かるかも……」
ちょっとした好奇心で、手帳を開くと……

※……手帳に書かれている分は《》で表現しています。
《前書き……この手記は、深海棲艦出現の最初期から戦場を駆け巡り、その後、【重巡洋艦　青葉】となり、真実を求め戦場を駆け抜けた1人の少女の記録である！ふっふーん（ドヤァ…！）
Ｂｙ翠・クロスロード（旧名）　記載日２０３８年？月？日》

パタン……↑（手帳を閉じた音）
「……は？」

今、すげぇウザイ文章が見えた気がする。
ていうかなんだよ『ドヤァ…！』って！ケンカ売ってんのか？
というか…
「２０５３年ってふざけすぎだろ。今は２０２０年だぞ」
多分小説てきなものを手帳に書いてそのまま忘れたんだろう。
持ち主を見つけたらからかってやろう。前書きでイライラした仕返しだ。
《１ページ目　２０３０年？月？日
おとーさんに手帳買って貰った。とっっっても嬉しいっ！
おとーさんとお揃いのペンが内蔵されている少し高価なタイプっ。
ねぇさんたちに見せたら、『大事にするんだよ？』や『私そんないい物貰ったことないのに。焼き鳥とかばっかりですよ！ずるいですぅ』『コラコラ、妹に嫉妬しないの』『前に自分で、ダイヤかパンなら私はパンを取るって言ったからでしょ』『あれはぁ、そのぉ…資本論を読んですぐ聞かれたから…』……と、後半全く関係ない話題になって難しかった。》
ここで、俺は違和感をおぼえた。
この文章は、小説とかではなく……どちらかと言えば日記の書き方になっている。
小説を書くとしても、この書き方はしないはずなのだ。
場面もキャラの描写もなく。セリフだけが続く書き方なんて普通はしない。
「まさか、本当に……？いや、そんなはず」
俺は、次のページを開くと……一枚の紙片が落ちた。
その紙片は、半分ほど燃えていたが、ソレが何であったかは理解出来た。
「コレは、紙片じゃない……紙幣だ。しかも渋沢※一の肖像付きなのは、まだ発行されていない紙幣……!?」
俺は、もしかしたらとんでもない物を手に入れたのではないか？
１ページ以降が気になったが、その前に。
「すいませーん、コレ買いたいんですけどー？」

「はいはい、この手帳は……３６０円だね」
「意外に高っ……はい、３６０円」
「はいはい……５０円１枚と、１０円２９枚に、１円２０枚…確かに、だが少しこまいのぉ」
「あはは……、すまねぇおっちゃん」
店番のおっちゃんに謝り店を出ると、俺は急いで家に走った。
そこまで家から離れていないから、走れば２～３分で着く。
そのはずだった。
トットットッ……（↑足音）
あれ？こんな家って遠かったっけ……？
ていうか、俺はなんでばあちゃん家に里帰りした？
いつ、古本屋に行ったんだっけ？
そう疑問に思った直後
キィィィンッ!!!
「な、なんだ!?手帳が光っうわっ!?」
その瞬間、手帳から文字が溢れ出し、俺の中に入っていく。
『敵はまだこちらに気づいてないよっ』『怖いのいっぱい見いいつけた』
『やったぁ！待ちに待った夜戦だぁ！』『あ、当たって下さいっ……！』
『私がみんなを護るんだからっ』『全主砲、斉射！てぇっ!!』
『第二次攻撃の要を認めます』『不死鳥の名はダテじゃない』
『怖くて声も出ねぇかっ？オラオラッ』
『あらあら～』『撃ちます…ファイヤー！』
『雨は、いつか止むさ』
「あたしは何者？ザイの残骸？ボーイング社製の戦闘攻撃機？それともウィリーの作ったプログラム？」
「ごめんなさい……■■■。まだ貴方を失――――――」
意識を失う直前、俺は、少女の悲痛な声が聞こえた気がした。

第2話　■■■「おはなししよーよ！」

「おー！よく戻って来れたねー、流石に死んじゃったかなーって思ったよ」
　真っ白な空間、その中心で彼女大仰な声をだして嗤っていた。
「君、最っ高！面白いよ！」
　青いの目がこちらをキラキラした目で見つめる。
　まるで…おもちゃを見つけた子供のようだ。
　1歩後ずさると、目をぱちくりさせて、笑う。
「ふふっ、怖がらなくたって良ーんだよ？ただ……少しだけおねーさんの昔話を聞いて貰えるかな？」
　話？
「あたしねぇ、ずっとこの真っ白空間に1人っきりなんだよ！だから、話がしたいの……どう？」
　彼女は、ジタバタと身体全体で『かまって』と言外に言ってくる。
　俺は、その提案に頷き肯定を示す。
「おっ？良い子だねぇー。……ますます欲しいなぁ」
　気のせいか、目の前の少女から無機質な瞳で見られゾクッとする。
「あぁ、気にしないで。じゃあ、あたしのとっておきを話すね！」
「今から、かなり先の未来……人類は地球が誕生以来貯めてきた資源を全て使い切って、空気を汚し、森林を潰し、水を枯れさせた」
　先程のふざけた雰囲気がなりを潜め、まるで、中世の吟遊詩人のような朗々した声が真っ白な空間に響く。
「何度もやり直す選択肢はあったんだよ？
　それでも人類は、全ての母たる地球から盗っていった。
　……ふふっあはは！
　凄いよね人間は。
　自分の私腹は肥やして、『正義』『絆』……全くどの口で言ってるんだろーね？
　ただ、地球（親）のものに勝手に価値をつけて、『略奪（売ったり）』した人間（子供）の成果が今の世界だよ。

幼稚園児じゃあるまいし、まさか大人になっても『親の玩具（資源）の取り合い』するなんて、ね」
ここまで言ったところで、彼女は「あ～ごめんね」といい頬を掻く。
心なしか、彼女のショートカットのサファイアブルーの髪が、仄かに輝いていた気がした。
「つい、ヒートアップしちゃった」
別に気にしてない。と、伝える。
「そう？ありがと！愛してる！」
へっ!?!?!
「ふふっ、か～わい～ね～」
ニヤニヤと笑い人差し指で頬を突いてくる。
ちょっ！俺で遊ぶなって……！
話の続きでしょ、今大事なのは。
「ふふっ、じゃあ脱線しちゃったから、少し早めに……
そして、世界が滅びつつある中、1人の人間がね
『後の世代にツケを押し付けて……！厚顔無恥のクソ野郎共がっ！』って世界の惨状をみて、そう思ったんだ。
それで、考えたんだよ。この世界を救う為にどうすべきか？ってね
そして、彼らは作った。
非物理層（アンフィジカル・レイヤー）を使いタイムワープを可能とする、人口爆発や乱開発で一定の水準を超えると文明を破壊……よーするに、地球環境に脅威とある事が起こったらソレを破壊するシステム。
凄かったよ、足りない分は、文字通り自分の存在を削ってまで作り上げたんだから。
……いやぁ、人の執念の結晶だね！」
……自分の存在を削ってまで……もう狂気の沙汰じゃないか…
「そうだねぇー、でもね！面白いのはこｋ…ｒａ…デ……！」
な、なんだ!?ノイズが……
「あちゃー、こｎ回はこ…ｏマデかァ。またあえｒｕｎｏを楽シみ二し……ヨ！」

そして、黒いノイズに視界を塗りつぶされ、俺の視界はブラックアウトした。

『私は、君と共に在る……見届けるのが、最初で最後の【私の意思】だから。

せめて、助けたぶんはあたしを楽しませなさい？でないと――』

最後の彼女の独白、小声であるにも関わらず……嫌に鮮明に聞こえた。

『――あたし好みに創り変えちゃうよ？』

第3話　誰ですか……？

「…ン……レンっ！大丈夫でありますか？」
「う…ぅん？こ、ここは……？」
目を開けると、日焼けしてない幸薄そうな美少女が、心配そうにこちらを見ていた。
……あれだ、きっと……疲れてんだよ。うん、きっとそうだ。
だって、俺は某アニメのサー※ルが「そっか、君は人付き合いが苦手なフレンズなんだね」って言われそうなぐらい友人関係鎖国の男だぞ。
もう一度、目を閉じて――、
「あ、あの、どうしたでありますか？」
そっかー、夢ではないのかー。ハハッ……どうしよう。
そうだよな、夢ならトンデモな……なんだっけ？何か夢を見た気がするんだけど…。
今俺が居る場所は、パッと見だと、医療機関なんだろうけど、この少女の存在が異質すぎる。
あの軍服が、コスプレとは思えないんだよな。
まぁ、聞いてみるか。
「す、すいません。ここは一体…？」
「ここは、我ら陸軍の医務室であります」
「はい……？今、《陸軍》って言いましたるでそうろう!?」
「レンが錯乱したであります!?救護兵ー！重傷者一名っ！」
「ちょっ!?コレは違っ」
「呼びましたか！」
「うおっ!?」
部屋の扉を開けて入って来たのは、赤……いや、ピンク色の髪の少し年上って感じのお姉さん。
「レンさん、修理ですか？どこが壊れたんです？」
「（いや怖っ！モンキーレンチ持って近づかないでっ！）いえ、その別に壊れてる訳ではなくて、ちょっと、驚いたと言いますか……」

「驚いた？」
「その…陸軍があることに……」
「!?…な…何を言ってるでありますか？」
「えっ？だって、今の時代は自衛隊だろ？」
俺が言った瞬間、空気が重くなる。
えっ何？俺なんかやらかした？
「……記憶障害、ですか」
「レン……いえ、中佐？私のこと分かるでありますか？」
「中佐？誰のことだよ」
「ッ！……うぅ、中佐ぁ」
幸薄少女が崩れ落ちるように倒れ、泣き始める。
えっ!?なになに？どういうことだよっ！誰か説明プリーズ。
「……自分の名前は？覚えていますか？」
「俺は、犀川　蓮太郎（さいがわ　れんたろう）だ。さすがに自分の名前くらいは」
「では、次の質問です。あなたの記憶は、どこからありませんか？日付も踏まえて教えてください」
「……２０２０年の５月４日、ばあちゃん家の近くの古本屋に行って、その時に…あれ？なんだっけ……？」
何か買ったんだよな、確か……ダメだ、思い出せない。
「……分かりました」
「な、何が？」
「私たちが、貴方を追い詰めてしまったんですね？だから、こんな事に……」
「な、泣くなってっ！一体さっきから何の話だよ」
「……レン中佐、動けるのなら、この部屋を出て、左から三つ目の部屋に行ってください。……会えば、思い出すかもしれないですから……」
「俺は、軍人じゃあないんだけどなぁ、たぶん」
取り敢えず、行ってみるとするか。
もう、訳が分からないし、なるようになるだろ。

「すまない、助かったよ。えっと……君、名前は？」
「……明石です。こちらは、あきつ丸…」
「……分かんないなぁ、全然」
医務室の扉を閉め、明石に言われた部屋の前に立つと……
『！提督さんの匂いがするっぽいっ！』
『ゆ、夕立!?』
『ちょっ!?待っ』
そんな声が聞こえた瞬間、ドッ……と、扉が吹っ飛び。
「てーとくさーんっぽーい!!!」
「うおぉっ!?」
中から、紅目の少女が、飛び掛って来た。
避けることが出来ず、腹に頭突きが入るマジ痛い。
しかし、不幸は終わらなかった。
頭突きによってバランスを失いそのまま背中から地面に吸い込まれるように激突。
「ゴフッ！」
ガッシャーン!!!
さっきこの子が吹っ飛ばした扉が、その天命を終えた音を聞きながら、また意識は沈んでいった。

第４話　テイトク＝サン？知らない人……って俺!?

「う……ぅん、あっ、知らない天井だ……」
「お、起きたっぽい！」
　声がする方に顔を向けると、突撃紅目と黒髪の、紅目と同じ制服の少女がいた。
「夕立。起きたらなんて言うんだったっけ？」
「ご、ゴメンなさい……ぽいぃ」
「気をつけろよ？……テイトクって人が誰か知らないけど、他人に迷惑をかけちゃダメだぞ」
「……何言ってるの？」
「えっ……？」
　あれ？何か明石と、あきつ丸と同じような反応を。
「提と……レン、私のこと、分かる……？」
「いや、ぽいぽい言ってる知り合いは居ないはずなんだが……」
「ポいぃ……」
「ねぇ、レン。僕のことは分かるかい？」
「ボクっ娘の知り合いも居ないんだけど……」
「そっか……」
　どうしよう、ありのままに答えたら空気が通常の三倍重い。
　わ、話題を振って逸らしてみよう。
「な、なぁ。ここは何処だ？医務室ではないようだけど」
　当たり障りのない話題を振ったつもりだったのに、二人は打ちのめされた表情となった。えっ？何俺、今度は何の地雷踏み抜いた!?
「ここはね、提督…レン中佐と一緒にみんなで作った娯楽室だよ」
「……何も、覚えてないっぽい？」
「……あぁ、何も分からない」
　２人はしばらく黙っていたが、しばらくすると顔を上げ、
「っ……ぼ、僕は白露型２番艦　時雨だよ。なんでも聞いてね？」

「白露型４番艦　夕立。私も、お手伝いするっぽい」
「…ありがとう、２人とも。じゃあ、早速だけど今の世界の現状を教えて貰いたい」
「世界の現状かい？」
「あぁ、俺の記憶が２０２０年で途切れていてな、何も分からないんだよ」
「提督さん、なんで私たちやあなたの役職とかを先に聞かないっぽい？」
　確かに、気になる。
　なんで俺が軍人になってるのか、何故目の前の少女たちは、第二次世界大戦期の軍艦の名前なのか。
　けれど……
「……自衛隊ではなく、海軍や陸軍があること。それに君たちのような幼い少女が軍属であること。気になることは絶えないけど……親父が言ってんだ、『まず、全体を俯瞰（ふかん）的に捉えて考えろ。個々では分からなくても全体で見れば理解しやすくなる』って。」
「分かったよ、じゃあまずは――――」

　その１時間後。
「――と、言うわけだよ。質問はあるかい？」
「……世界詰みかけてるやん!?」
「うん、そうだね。真っ当な反応だよ」
「全然覚えてないっぽい……」
　時雨が話してくれた現状は、＼（＾ｏ＾）／←このＭｒ．おわた氏がフルタイムで活躍しているということだった。
　話を要約すれば……
　ことの発端は２０３５年、某超大国の第七艦隊が太平洋上で消息を絶ったことから始まった。
　直ちに捜索隊が編成され、消息が途切れた地点に居たのは……少女の姿をした何かだった。
　海面に立つ少女は、捜索隊に対して砲撃を行った。

これが、記録上最初の邂逅にして、宣戦布告。
そして、その同時刻。
世界中の海から、ソレは顕れた。
既存のレーダーや通信を無効化するだけでなく、ミサイルを容易く避ける機動性を持ち、人と同じサイズであるにも関わらずその一つ一つがイージス艦を容易く屠れる力を持っている。
そんな存在に現行の兵器で抗えるはずもなく、人類は制海権を奪われ、あちら側の航空母艦によって制空権も奪取された。
そして、彼らを人々はこう呼んだ。
――深海からの使者、深海棲艦と。
「なぁ、これ詰んだろ？どうして、まだ日本は存在できてる？」
「それで私たちの出番っぽい！」
「えっ？」
「私たちは【艦娘】、深海棲艦に唯一対抗することができる存在っぽい！」
「僕たちはね、人間じゃないんだ。……深海棲艦の残骸から人間が作り出した兵器。それが僕たちなんだ……」
「ちょっと待ってて」と時雨は煙突が付いた機械を背負うと、夕立が渡した手のひらサイズの石を片手で軽く握るだけで、砂に変えてしまう。
「ほら」と言う時雨や夕立の表情からは、『不安』『恐れ』がありありと浮かんでいた。
……何が兵器だ。ちゃんと彼女たちは思考し、悩み、今俺が苦しませてしまっている。
（そうだよ、キミの目の前にいるのはＡＩでも、ましてやＮＰＣでもないんだから。
ほら！ちゃんと声に出して言ってあげなよ？）
ったく、こーゆうのは俺の役じゃないってのに。
（さぁさぁ、自信持って言ってみよー！）
煽んなよ、ったく。
「時雨、夕立。俺は、ちょっと反抗期なんだよ」

「何を言ってるの？」
「いきなり何言ってるぽい？」
「あ～だからな、周りが２人のことを『兵器』とか何だとか言っても、俺はその分だけ声を上げて言ってやる『こいつらは、無知蒙昧なお前らよりずっと人間だ』って……だから、その『兵器』とか自分で言うなよ？」
　時雨と夕立は顔を見合わせると、
「提督は、本当に変わらないね。……ふふっ…良かった提督は提督のままだ……」
「提督さんは、もう少し考えてから言った方がいいっぽい……ぐすっ」
「…あぁー、うん。次から気をつけるよ」
「ふふっ、本当に変わらないなぁ、提督は」
「心配して損したっぽい」
　２人の表情には『不安』や『恐れ』などの『負の感情』はなく、
　子供らしい無邪気な笑顔で彩られていた。
「まぁあれだ、すまないが俺はなんにも覚えてない。だから頑張っていくが、しばらく足を引っ張る形になると思うが、２人ともよろしく頼む」
「っ……!?」
「しまったっぽい！」
「えっ？何その顔『私たちこのままだと殺られる』みたいな」
「！」コクコクッ
　えっ!?まじでな――
《ビー！ビー！ビー！民間人護衛中の第三艦隊より入電、『我、水上打撃部隊ヲ確認。至急援護ヲ求ム』。繰り返します『――――。》
「っ！」
「提督、早速来たようだよ、噂をすれば―ってやつだね」
「一体なにが……」
　時雨の言い方から、なにが来ているのか察した。
　嘘だろおい、まだ艦隊とか編成もよく分かってないんだぞ。

「深海棲艦が民間人を襲おうとしてるんだ。提督、艦隊の指揮を」

第5話　指揮官ライノ

「……噂なんてするもんじゃないな…」
「そ、そんなこと言ってる場合じゃないっぽい！」
そう言われても、基礎のひとつも知らない状態で行動なんてできるかよっ！
ここは、慣れている時雨たちに任せるべきだ。
「時雨、俺『ゴホン…早速編成をする。戦艦並の火力を持って高速機動できる人と、遠距離から攻撃ができる人を。旗艦は時雨だ。頼む！』」
「！りょ、了解。直ちに編成並びに、出撃準備を開始するよ！」
えっ？ちょっ待っ!?なになに勝手に口が……!?
『夕立、キミは回避力が高い人たちを連れて先に出撃。敵の注意を引いてくれ。火力は必要ない、俺に突っ込んで来た時みたく俊敏性を活かして第三艦隊と民間人を護ってくれ』」
「任せるっぽい！ソロモンの悪夢を見せてあげるっ！」
２人は敬礼をすると、急いで娯楽室から飛び出して言った。
（ふぅ……疲れたー。口調変えて真面目に指示するのってムズいわー）
頭の中で響いたのは、さっきも聞いた声。
……さっき俺の口で喋ってたのは、キミか？
（そだよ！あっ、姿が見えないと分かりにくいなぁ……そうだ！そこの鏡の前に立って！）
コイツ、！（エクスクラメーションマーク）めちゃくちゃ多いな……ん？
……鏡？と思い視線を巡らせれば……あった。
意匠を凝らされた木の枠組み、イメージはハリポタに出てきたやつが一番似てる。
けど、なんで鏡？と言う疑問はすぐさま氷塊した。
『やっはろー！あたしライノ！よろしくー！』
「……唐突の由○ヶ浜やめい」
さっきまで俺だけが映っていた鏡には、１人の少女だけが映ってい

る。
サファイアブルーの色を持つショートカットの髪、とろんとした目元でこちらを見ている。
服装は俺の真っ白な軍服と違って、米海軍のサマードレス。それに青を基調としたジャケットに黒のネックタグを合わせており、少し着崩している。
『あはは！やっぱり君面白いね！まさか驚く前にツッコミを入れるとは……うん』
「……キミは誰だ……いや、あれ？どっかで会ったことないか？」
『ッ…なにー？口説いてるのー？』
「ばっ!?そ、そんなんじゃ…！」
弁明しようとすると、廊下からドタドタと足音が複数聞こえてくる。
多分先行で出撃する夕立たちの艦隊だろう。
さすが、駆逐艦。速さでは他艦とは一線を画す……あれ？駆逐艦？俺はそんなの知らないはずなのに……あれか、記憶が戻ってきてるってことか？
『まぁ、積もる話は後ですることしてー』
瞬間、ふざけた雰囲気がライノから消え、静かな水面のような目が俺を見る。
……俺は、こんなことを以前も体験した。一体どこで……？

『初回はサービス、あたしが指揮を執ってあげる。だから、ちゃんと見て感じなよ？熟練者の指揮と、貴方の艦隊の練度を』

第6話　友軍救出作戦（前編）

『じゃあ、またあたしが話すね！』
「あっ、あぁ……頼む」
　ガチャと扉を開けて夕立を筆頭に同じ背丈の少女たち五名が入ってくる。
「夕立、以下五名只今参上しました……ぽい」
　ぽいがアイディンティティなのか……
『よし、揃ったな。では、これより……』
（このあとは提督が言って。私の言葉を復唱すればいいから）
　えっ？あ、あぁ…了解。
　俺はライノが（心の中で）言うことを復唱していく。
（ゴホン、これより友軍救出作戦を開始する！）
「ゴホン、これより友軍救出作戦を開始する！」
（現場の指揮は、旗艦夕立に一任！）
「現場の指揮は、旗艦夕立に一任！」
「「「「了解！」」」」」
　夕立らが出撃したあと、気になっていたことを尋ねてみた。
「な、なぁ。なんで俺が指揮を執る必要がある？みんなの方が経験豊富だし…」
『レン、さっき時雨っちの話を聞いて理解してるだろうけど、艦娘は深海棲艦を倒すことができる……ここまでは分かってるでしょ？』
「ああ」
　鏡（ライノ）に向かって頷いて肯定する。
『けどね、人間は艦娘のことを信じてはいない。いや、むしろ恐れてるの。あたしやタイフーンみたく、システムの鎖で雁字搦めにしたいの』
　あたしやタイフーンみたく、という言葉からは、まるで……呪詛のような声だった。
　……正直に言えば、この俺の中にいる少女のことはとても気になる。

傍から見れば、今の俺は……二重人格の某超兵さんのように見えるんじゃないだろうか？

まぁ、今はそんなこと考えてる余裕はないか……

「だけどライノ、それだと柔軟性に欠ける。規則や法は守るものだけど、それで対応に遅れたら取り返しがつかないことになるってことぐらい、上だって理解してるだろ？」

『……そう。だから、上層部は《現場の指揮官が命令しないと実力の半分も発揮できない》というロックを艦娘にかけているの。システムの鎖は最小で、けれど効果は絶大ってね』

なるほど、それなら先程の行動も納得できる。

要するに、提督の命令が鍵の役割を果たしているから、ライノという他人ではなく自分で言わないと艦娘は本来の力を出せない、か……

『理解が早いねー』

「いや……なんか俺の同級生が言ってた令呪っぽいなぁって？」

『あー、Ｆａ○ｅね！確かにあれっぽいかも。まぁ、回数制限ないけどねー』

「へぇー」

あれってＭＡＤでしか見たことないんだよな。

中学で１度も話したことがない同級生に「犀川！お前、俺ＴＵＥＥＥＥ物好きだよな！な？じゃあＦａ○ｅ読んでみろよおもしれーから！」なんて言われて、「いや誰だよお前……」とか「友人関係鎖国の陰キャに話しかけないでくれ…」とか思って、結局１回も読まなかったし、アニメも見なかったな。

ていうか、中三の受験の時に勧めるなよ……そんな余裕ないだろ……

『レン～、大丈夫？負のオーラを放ってるんだけど……』

「いや、ちょっとトラウマが襲い掛かって来てさ……」

『トラウマって襲い掛かって来るの!?』

「比喩だよ比喩」

ふふっ……ちょっと天然って言うか、反応がいちいちオーバーで面白い娘だなー

じゃなくて！はぁ……話が脱線しすぎた。
目下の最優先事項は、民間人と第三艦隊の艦娘を殺させないこと。
それと助けた後、その人たちの受け入れ用意をしておかないと…
それに、俺が司令官ってことは、この施設や、夕立が出撃した海域がどんな所なのか知っておかないと。
取り敢えず、それを確認しに行こう。
『あれ、どこ行くの？』
「えっ、ちょっと現状確認しに行こうかなって」
『……となるとー、淀っちのとこに行くべきだよ』
「淀っち？」
『そだよっ！まぁ、廊下に出て執務室に行きたいって言えば誰か連れてってくれるよ？』
「……以前の俺は人望があった……のか？陰キャですよ？俺」
『うん！それは保証するよ』
ライノとの会話もそこそこに鏡から離れ、娯楽室から廊下に出る。
廊下に出ると、ちょうど時雨よりお姉さん（一番近いのは明石くらい）が娯楽室を通り過ぎる所だったので、声をかけてみる。
「す、すいません。執務室の場所を教えて貰いた――」
「!?提督ーー!!!」
「――いんだが!?」
頭にアンテナを付けた少女が、目に涙を浮かべて抱きついてきた。
「良がっだ！ほんっっとうに生ぎでで!!」
「お、おう。一応身体はピンピンしてるぞ」
胸部装甲を当て、俺の理性さんのゲージを2本破壊すると身体を離し、
顔を涙と鼻水でめちゃくちゃにしながら「生きてた……グズッ」と袖で顔を拭っている。
「帰ってきたなら一言言ってくれよ！復帰祝いにみんなでまた宴会でも…」
「すまない、俺は君たちが誰か分からないんだ
「……え…？」

「身体は問題ないんだけど、記憶がないんだ」
「……冗談キツイぜ……冗談だろ……なっ？」
「……」
「ウソ……だろ」と呟き、ヘナヘナと座り込んでハイライトオフの死んだ目で虚空を見つめる少女に、俺はどうすべきか分からなかった。

第7話　友軍救出作戦（中編）

俺が、頭にアンテナを付けた少女（姉御？）―摩耶に事情を説明していた頃……

――泊地近海

レンの居る泊地から出撃した単縦陣で海域を進む六人。

「第三艦隊はまだ見えないっぽいっ!?」

その旗艦を任された夕立の焦った声が海に響く。

「これ、焦るでない夕立。焦ればその分索敵が疎かになるぞ？」

「初春の言う通りだ。夕立、少し落ち着け」

そんな彼女に冷静に声をかける古風な喋り方の駆逐艦―初春と、その妹艦の若葉。

そして、周辺監視（対潜・対空警戒）を行う寡黙な弥生と真面目な朝潮、不知火。

これが、敵の注意を引く夕立旗艦の臨時第十四駆逐隊の艦娘達だった。

「落ち着いてられる訳ないっぽいっ！」

「その思いは皆同じだ。だが……」

若葉はそこで区切り、隊列から離脱し夕立の横に並ぶ。

苛立たしげに若葉を見た夕立は、彼女の手が血が滲み出るまで握り、激情を押し殺しているのをみて絶句する。

「お前は今は旗艦だ、我々に指示を出すものが一時の感情に身を委ねるな」

「ッ……分かったぽい……」

有無を言わさない圧力の若葉の声に夕立は押し黙る。

夕立が落ち着くと、若葉は「すまないな、こんな重責を背負わせてしまって……」と言って夕立の視界の端に消えていく。

「気をつけるっぽ――」

「あうっ」

「――い？」

夕立が後ろを振り返れば、パチンと軽く扇子で叩く音と頭をおさえ

る若葉がいた。
「はぁ……若葉。お主、今回は仕方ないとはいえ、自分が出来ぬことを他人に求めてはならぬぞ」
「すまない姉さん。次からは気をつける」
「……手を出せ、消毒……は出来んが絆創膏を貼ればいくらかマシじゃろ」
「うっ……すまない姉さん」
夕立が若葉の方をチラッと見ると、姉に絆創膏を貼って貰い羞恥心か真っ赤になりながらプルプルと震えていた。
そんな若葉の滅多に見ない姿に、夕立は他の子に聞こえないほど小さく「ふふっ」と笑い視界を前方へと戻す。
心なしか、さっきよりも視界が開けたような気がした。

そのお陰で、夕立は気づくことが出来た。
本来の進路より外れた島影から、砲撃時の閃光が瞬いたことを。
「ッ見つけたっぽい！……最大戦速、これより陽動を開始するっぽい！」
「「「了解（じゃ）（だ）（です）!!」」」

一方その頃—泊地
「じゃあ、記憶喪失ってやつでレンはあたし達のことを思い出せねぇのか？」
「そうです、ごめん……覚えてなくて」
「謝るこたぁねぇよ。……そっか、だからまだ提と、レンのことが知らされてねぇのか」
廊下はいくらなんでも目立つので、今は目の前の少女（姉御じゃないかな……）の私室に居て、事情を説明していた。
「だから、ってどうゆう事です？」
「ここの泊地、訳ありが多いんだよ。あたしも含めてな」
摩耶はぽつぽつと語る。

「ブラックとか、弱小とか壊滅した所からの寄せ集めなんだ。
中には、旧型だからって理由だけでここに飛ばされたやつもいる。
生意気な口をきいたってだけで飛ばされたのだっている、あたしもそうだったしな…」
「……そんな理由で。いや……何処の世界にもクズはいるものか……」
（まぁ、そりゃあ人間だし？そこらの動物や放射能より有害だからね）
心の中でナチュラルに会話に混じってるライノの言い分（心の中なので摩耶には聞こえない）に「まぁ、人間は醜悪ってのは分かりきったこと、なんだよなぁ」と、こちらも心中で返答する。
「だからよ、あたし達の曲がりなりにも帝國軍人としての意志を取り戻してくれた、優しいあんたにみんな惹かれてんだよ。ガチ勢は特に、味方がドン引くぐらいに……」
「……もしかして、記憶喪失とはいえ、俺がここに戻ってきた？のを摩耶が知らなかったのは……」
「みなまであたしに言うわすなよ」
つまり、そういうことだろう。
摩耶は理解力もあるし、自制も効くのだろう。
つまり、他の子に見つかってガチ勢だった場合……な、なんか身体が震えるなぁ…武者震いってやつかなぁ…！
不用意に出たの失敗か――
バンッ!!
「提督ッ!!!!!!」
「うわぁぁぁぁ?!?!!?」
「きゃあああああああッ!!!!!?」
「ど、どうしたの…？」
摩耶の私室に入ってきた闖入者―時雨は戸惑った声でこちらに尋ねてきた。
「……フラグの折り方が斬新……」
「どういうこと？」

「なんでもないです」
「？まぁ、いっか。提督室に行ってもらって構わないかい？あそこで指示を出してもらわないといけないんだ」
「あっああ、分かった。……提督室には淀…さん以外誰かいるんですか？」
答えが怖くて敬語になってしまったが、時雨は特に気にすることなく
「ううん、今は大淀さんだけだよ？」
「そうか…！良かった」
……あれ？
なにか致命的なことを忘れてる気がする。
……ま、いっか。思い出せないってことは大した事ないだろ。
「すまないけど時雨、執務室までの案内を頼むよ」
「うん、任せて」
「じゃあまたな、摩耶」
「お…おう…」
未だに真っ青な摩耶を置いて、俺は執務室に向かった。

時雨が去った後の摩耶の私室
「ガチ勢の四位、時雨が来た……!?」
過呼吸気味になっていた呼吸を整え、未だに真っ青な顔で執務室の方に視線を向ける。
「提督、気づいてんのか？なんであたしの部屋にまっしぐらで時雨が来たのか」
（はぁ……電波ビーコンを付けられたんだねぇ。多分内ポケの中に）
なるほどねぇ、とライノは摩耶の独白から状況を理解した。
（んー、あの若干ヤンデレ化しつつあるのが四位かぁ……上位が怖いね。けど、時雨以上の依存度なら四六時中そばにいそうだし……まだ知らされてないのかな？）
（もしも知ったら……レン強く生きなよ！）とライノは無責任なことを思いながら、レンの後を追った。

第８話　友軍救出作戦（後編）

「シズメ……シズメ……！」
「まーだ、沈めないねっ！」
第三艦隊に襲いかかる筆頭は海の王者、戦艦。
両腕に巨大な砲塔を持つレ級に対して立ちはだかるのは、
右腕に単装砲、左腕に三連装機銃を構えたデストロイヤーの名を冠する旧型艦。
駆逐艦　皐月（改二）である。
「シズメェ……ッ!!」
戦艦の恐ろしい威力を内包した砲撃が皐月に襲いかかる。……が
「僕にかなうと思ってるの？可愛いねっ！」
皐月はまるで散歩するかのような足取りで、容易く砲撃を避け肉薄する。
「……ッ!?」
「沈んじゃえー!!!」
足首に装着された魚雷発射管から放たれた必殺は……
ドッ――――――カァァァン!!!!!!
甲高い音と水柱を立てる。
しかし、皐月たちが警戒を緩めることはない。
「磯風、今ので何体目かな？」
「戦艦という意味なら二体目、深海棲艦なら六体目だ」
「数が多いわねー、もう！やんなっちゃう…数の暴力はんたーい！」
「陽炎さん、言っても仕方ない事言って、辛くない……？」
「止めてッ！そんな目で私を見ないで……！」
「ノリノリじゃねーか」
……緩めて……いな、い……？
会話こそ余裕が感じられるものの、既に弾薬は危険値、魚雷に関しては残弾０。
燃料は遠征だったため、まだ余裕があるが、みんな無事にこの包囲網を突破することが出来ない。

そして最大のネックが、民間人を乗せた大型船の護衛である。敵弾が当たれば艦娘のような加護を持たない船では1発当たるだけでも危険なのだ。
敵を倒す、もしくは敵が船を攻撃出来なくする無力化を僅か六名で行わなくてはならない。
それが今の第三艦隊―皐月・磯風・陽炎・村雨・天龍（話した順）―のおかれた状態だった。
「あーもう！・やんなっちゃうっ！」
「それに関しては同意しよう……クッ…」
本来なら第三艦隊がこれ程遅れをとる相手ではない……本来なら。
（くっ…！・やっぱりロックのせいで身体が思うように動かないっ）
皐月は敵の砲門を潰し、時には自らの砲撃で敵弾を相殺しながら愚痴る。
頭を過ぎるのは司令官の倒れる姿。
私にかかる温かい赤い雫……
……僕が弱かったから……
呆然とした私の目の前で司令官に入っていく、…おぞましく毒々しい、サファイアブルーのなにか。

「皐月ッ!!!!!!!」
「え」
瞬間、凄まじい衝撃と共に吹き飛ばされる。
単装砲や三連装機銃が手から離れ、魚雷発射管が衝撃で歪む。
海面を数回バウンドし船に受け身もロクに取れないまま激突する。
「かふっ……!?」
「シィィィィ!!!!」
皐月を砲撃した深海棲艦―重巡リ級ｆｌａｇｓｈｉｐが歓喜の声をあげて砲門を向ける。
「皐月ッ!?避けろ！」
（避けたら……船に当たる…）
皐月は、ボロボロの身体を引きずるように立ち上がりリ級の前に立

ち塞がる。
（もう、船の利用価値はない。だって、高練度の僕らに逃げるという選択肢をなくす為の餌で、僕らにはもう燃料も弾薬もないから逃げることが出来ない……つまり、もう船を沈めてもいいということ）
ここで皐月が避けても、敵は船を撃つだろう。
ここで皐月が避ければ、延命出来るだろう。
けれど、
「僕は……護国の艦として、目の前で、また喪う訳にはいかないんだ……！」
第三艦隊の皆は敵に阻まれてこちらに来れない。
「シィィィ……！」
「……司令官…」
敵の砲門が火を噴き……

砲弾を発射することなく爆発する。
「はぇ……？」
「間に合ったぽーーーーい!!!!」
声のした方に視線を向ければ――――居た。
私の単装砲を構える、ぽいぬ（夕立）が。
――支援艦隊が到着しました。

――――泊地
「よしっ！間に合った！」
（編成は……うん、十分対応可能だね。陽動兵力だけで殲滅できるよ）
「えっ…？マジで」
執務室の無線機から聞こえる夕立からの報告を確認し、ライノは主

力は送らなくていいと判断する。
けど、俺にとっては少し不安である。
何せ、夕立達の艤装は回避力を高める装備を積んでいるため、攻撃力が足りないんじゃないかと。

「提督、艦隊が帰投しました」
「早っ!?えっ……被害は？敵は倒せたのか？」
「大破一名、中破二名、小破三名で轟沈した娘はいません。また、敵兵力は殲滅シタノようです」
「ふぅ……良かったよ、マジで……えっ？殲滅？」
「はい」
まぁ、そんな不安をよそに殲滅してしまったんだけど……
「お、ｏｈ……報告ありがとう、大淀さん」
「提督、私のことは大淀と呼んでください。以前と同じように」
「そ、そうなんだ。じゃあ、またよろしく大淀。（なんかプロフェッショナルみたいな雰囲気の人だなぁ）」

……以前の俺が原因なのを知るのはもう少し先。

第9話　〈港無き艦隊〉

友軍救出作戦の夜とある島にて……

そこは、深海棲艦から取り返したばかりの島。

艦娘たちが（見回りや夜勤を除いて）寝ている中、唯一明かりのついた部屋で二人の男女がある戦友について話していた。

「さて、レンは無事にリンガ泊地に再着任出来たな」

男の方は額が広い印象がある面長の顔に、茶色ともオレンジともつかぬ髪の色をランプで反射させながら、鋭い目つきで書類を読んでいる。

「ええ、鬼八さん。多少のトラブルはあったようだけど、今は特に問題はないわ」

【港無き艦隊】又は【放浪艦隊】と呼ばれる艦隊の司令官――水原鬼八（すいばらきはち）は、ふうと肩の力を抜く。

「そいつぁ重畳（ちょうじょう）ってとこか……火垂、時雨の送った報告書を持ってきてくれ」

「わかったわ」

水原の秘書を務める少女――紅露火垂（こうろほたる）が数刻前に届いた報告書を持ってくる。

通常なら提督の秘書「艦」がいるものだが、この艦隊に置いては前世のこともあり二人が離れたがらなかった結果の例外的な処置である。

しかし戦果に関しては弱冠18歳にして同年代ではトップであり、彼より軍属の長い者にも比肩するほどだった。

また前世での経験があるお陰で艦娘程ではないにしろ二人ともある程度動ける為、歴代最年少の少将でもある。

そんな二人が今一番気にかけていることは、一人の戦友だった。

「鬼八さん、持ってきたわ」

「サンキュー火垂、おっ麦茶まですまねぇな」

「いいの、私が好きでやってることだし」

「よく出来た嫁さんだよ、お前は」と鬼八が言えば、火垂は微笑み鬼八

の膝の上にちょこんと座る。
「ちょっ!?火垂さん?一体なにを……」
「疲れたから、座っただけよ。膝を借りるわね」
「まさかの事後報告っすか……」
鬼八がよく見れば、火垂の横顔が朱に染まっている。
彼は、そんな可愛らしいパートナーの頭を撫でる。
「ん、んん～♪／／／」
「可愛いなおい」
かつて悪友に「目に入れても痛くない」と言ったことを思い出しながら、鬼八の前でしか見せない、ふにゃーとした顔（横顔なのが少し残念）を拝む。
彼は火垂の頭を左手で撫でながら、報告書にも目を通す。
「……」
「…ん…っ…」
携帯ランプの仄かな光が、徐々に険しくなっていく鬼八と報告書を照らす。
「ふぁぁ…鬼八さん、読み終わった……？」
「あぁ…」
鬼八はしばらく浮かない顔をしていたが、やがて一つの決断をする。

「これより、現海域より撤退し、リンガ泊地に向かう……戦友に会いに行くぞ、火垂」
「分かったわ、鬼八さん」

～同時刻～
「ん？なぁ〈揚陸艦〉ってなんだ？ホワイト○ースのことか？」
「ぷッあはは！……それは宇宙艦の〈強襲揚陸艦〉。〈揚陸艦〉は、大発動艇を持ってきてくれる有難い資源や人員の輸送艦だよ！元々は海軍を信用してなかった陸軍が独自に～」
「いや、雑談は今はいいから……」

レンは、艦種や鎮守府の設備や人員（艦娘）の把握にライノの協力のもと、寝るまを惜しんで取り組んでいた。

第１０話　記憶の断片～その１～

「はぁ……空はあんなに蒼いのに……」
なんか、空を見てるとほっとするんだよなぁ。
地球の七割を占める青が恐怖の対象になってると尚更。
少なくとも、空の蒼はまだマシだ。
「……はぁ」
徐ろに首にかけていたペンダントと、識別票（ドッグタグ）を取り出し、
再びため息をつく。
……少しゆっくりし過ぎたな。『委員長』に怒られる前に…
「現実逃避は終わったか？工廠で最終確認（メンテナンス）すんぞ」
「ッ!?びっくりしたぁ、ゴホン。すんません隊長殿、今行きます」
急いでそれらを仕舞い、隊長や同僚たちのいる第二工廠（軍事工場）に向かう。
「悪りぃ、遅れた」
「遅せぇぞ何やってたんだよ？」
「空を見ながら、この時代に生まれたことを嘆いてた」
「あ、あぁ……そりゃぁ……」
「冗談だよ。苦しい思いをして親が産んでくれたのに、そんな贅沢言うわけないだろ」
「分かりにくい冗談言うなッ!!!!」
これがこの部隊の平常運転。
幾度となく生き延びた『死に損ない』の寄せ集めの陸上自衛隊第二旅団麾下特設第０２６小隊。
奴ら相手に、生身で戦い生き延びて来た百戦錬磨の兵（つわもの）たちである。
「いつもながら、ここまで軍の在り方から離れた部隊って凄いですよね」
そんな俺らのコント？を少し離れた所で見ながら、真面目なメガネっ娘（あだ名は『委員長』）が注意すべきが悩んでいる。

「放っておけ、あれはあいつらの戦う前の儀式のようなものだ。これから実戦という時に緊張するのは危険だしな。
…ある程度は息抜きしなければ、アレを目にしただけで闘争心が折れる」
『委員長』の隣に立つ傷だらけの大男、『隊長』は、『委員長』にコーヒーを差し出しながら苦笑する。
「まぁ、規律は最低限守っているんだ、文句を言われる筋合いはない。それに…」
「それに？」
「下には規律やら法律やらを押し付けるが、上はロクに守ってないんだ。……なら、俺たちも真面目にこなさなくていいだろ？」
肩を竦めて「はぁ」と大袈裟な仕草をする大男を見るのは中々のギャップだった。
（ギャップ萌えは、さすがに無かったが）
「『隊長』はコミカルなんだがなぁ」
「見た目は、正直……典型的な強面軍人だし」
「『隊長』が唯一休んだ日ってさ、幼稚園児に怖がられて挙句泣かれたからだって」
「「「『隊長』……」」」↑（憐れみの瞳）
「メンテナンスしろよお前ら」
「「「はぁーぃ『委員長』」」」
無駄話しを終えると、各々が腰ベルトに装備していた兵装を取り出し、メンテナンスを始める。
兵装は、刀・薙刀・盾・銃・鉄甲・小太刀・警棒ｅｔｃ……その殆どに、木や銀が混じってる。
奴らに効果があった寺社で清められた、永い時を重ねた木……教会で洗礼された銀……
それを現存している武器のパーツに組み込むことで、奴らに対する矛となった。
・・・・・
・・・（メンテナンス中……）

・・・
・
「メンテは終わったな！」
「「「「はっ！」」」」
「よし、総員出撃！目標　元佐世保鎮守府！深海から湧いて出てきた有象無象に、我らの土地を土足で踏み荒らしたことを後悔させてやれっ!!」
「「「「了解っ!!」」」」
これは、奴らが深海棲艦と呼称される前の話。
艦娘がまだ現れる前、人の身でありながら人智の及ばぬ『化け物』に挑んだもの達の最後の人間の部隊。
・・・
・・
・
『なんで今更……あぁ、そうか』
『司令官ッ!?なにを！』
ケッコンカッコカリをした戦友を敵戦艦の射線から体当たりで強引に外す。
と、同時に軍刀で敵弾を逸らすが、パキィンッと音を立てて大戦時からの愛刀が折れる。
『……そうかこれが走馬灯』
ケッコン艦である――――がこちらに向かって走っているが、到底間に合わない。
というか、むしろ間に合って欲しくない。
間に合う＝死なのだから……
『……俺は――――』
瞬間、敵の砲門から閃光によって――――。
誰かを守れたのだろうか……？